

氏名	ウスモノフ ファルフ
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博 甲 第 7620 号
学位授与年月日	平成28年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	Japanese soft power construction in Tajikistan (タジキスタンにおける日本のソフト・パワー構築)
主査	筑波大学 准教授 博士（国際関係学） タダバエティムール
副査	筑波大学 教授 博士（法学） 辻中豊
副査	筑波大学 教授 博士（国際政治経済学） 潘亮
副査	筑波大学 助教 博士（文学） 塩谷哲史

論文の要旨

本論文は日本の対タジキスタン外交政策を取り上げ、その中での日本のソフトパワー政策の構築、その過程と課題、そして日本の外交政策におけるタジキスタンの位置づけなどの分析を行った。内容として本論文は序論と5章から成り立っている。本論文の序章は研究方法、論文の構造について述べた上で、先行研究の整理を行い、タジキスタンの国家としての独立、同国の諸外国との関係構築および国際関係におけるロシア、米国、中国と日本の位置づけを分析する。

その後、第一章は主に日本の外交政策の概要、日本とタジキスタンのこれまでの関係、そして国際関係におけるソフトパワーの概念の誕生と日本の対タジキスタン政策への適用に関する先行研究の整理などを中心に書かれている。本章の第一節は日本の中央アジア外交とタジキスタンを含む中央アジア諸国の日本との関係の発展過程を把握し、その過程において各段階の特徴などを明確化している。第二節は日本とタジキスタンの国家間関係を理論的な枠組みを通して説明することを試み、その中でも国際関係の大理論のリアリズム、リベラリズムなどを批判し、構築主義（コンストラクティビズム）を主な理論的な枠組みとして採用する。本論文の中心となる理論的な仮説は、ジョセフ・ナイ・ジュニアのソフトパワーの概念がアメリカの外交政策のみならず日本の対タジキスタン政策にも適用できるという点である。本論文は国家が軍事力や経済力などの対外的な強制力によらず、その国の有する文化や政治的価値観、政策の魅力などに対する支持や理解、共感を得ることにより、国際社会からの信頼や、発言力を獲得し得る力＝ソフトパワーはアメリカと同様に日本にもあると主張するが、ジョセフ・ナイの定義の問題点も指摘し、日本の対タジキスタン外交政策においてアメリカ型のソフトパワーと日本型のソフトパワーは本質的に異なることを強調する。

第二章は、日本の対タジキスタン政策の分析とその過程でのJICA、外務省などによる様々な取組を紹介している。第二章の第一節はJICAの活動においてソフトパワーの概念がどのように活用されているのかを紹介し、第二節は中央アジアプラス日本の対話の枠組みにおけるソフトパワーの役割を整理する。対話における知識人の対話の仕組み、経済界の対話など様々な交流のチャンネルを紹介し、これらが日本のタジキスタンにおけるソフトパワー構築の不可欠な様相になっていることを述べる。

第三章は日本の外交政策におけるハードパワーとソフトパワーの相違点を取り上げ、なぜ日本のハードパワーよりソフトパワーの方が中央アジア地域とタジキスタンにおいてより効果的成果を生み出しているのかを説明する。ハードパワープロジェクトの紹介の中で日本がタジキスタン国内のエネルギー、水関連施設に投資しつつも、その額はほかの大国より低く、各プロジェクトにおいて日本の存在感を示すことが難しいと主張し、むしろ教育や人材育成において日本のタジキスタン経済への貢献は目立つと強調する。

第四章のタジキスタンにおける内戦後の復興とガバナンスにおける日本の役割、第五章のタジキスタンの人口開発の課題とその課題解決に対する日本からの教訓である。これらに加えて、本論文は様々な資料を添付資料として含んでいるが、それらは本論文の主張の理解に不可欠なものである。本論文はタジキスタン内戦を取り上げ、タジキスタンの発展にとって最も障壁が多かったこの時期に、日本が経済的な支援のみならず和平交渉の手段として、日本国内における相互に対立する集団の代表者間の交渉を提案したことを高く評価した。本章によるとそのような和平交渉をきっかけに日本とタジキスタンの関係が新たな段階に発展し、日本の影響力をさらに強めたと述べている。

そして、第五章は本論文の主張の裏付けとして重要な事例となる、人口計画プロジェクトとタジキスタンの人口計画に対して日本の教訓が活用されている事例を取り上げる。本章によるとタジキスタンと日本は人口の現状が異なるものの、タジキスタンが日本から学びその知識を適用している分野が多いことを示し、中でも政策決定過程、政策関係者の教育などの分野を特に重要と指摘した。

審査の要旨

1 批評

本論文の中心となる仮説は、ジョセフ・ナイ・ジュニアのソフトパワーの概念がアメリカの外交政策のみならず日本の対タジキスタン政策にも適用できるという点である。本論文は国家が軍事力や経済力などの対外的な強制力によらず、その国の有する文化や政治的価値観、政策の魅力などに対する支持や理解、共感を得ることにより、国際社会からの信頼や、発言力を獲得し得る力＝ソフトパワーはアメリカと同様に日本にもあると主張するが、ジョセフ・ナイの定義の問題点も指摘し、日本の対タジキスタン外交政策においてアメリカ型のソフトパワーと日本型のソフトパワーは本質的に異なることを強調する。アメリカのソフトパワーの柱としてとして三つの要素が挙げられている。一つは、その国の有する文化（文学や美術、高等教育、高級文化や大衆の娯楽などの大衆文化）と価値観である。また、ジョセフ・ナイは国家の国内外における政策も、ソフトパワーの源泉としている。さらにジョセフ・ナイはアメリカの言語、技術力、音楽、映画、テレビ番組についてもアメリカの魅力であり、ソフトパワーの一部であると主張する。本論文はこれらの部分に関してアメリカの外交政策において重要な部分であることに同意しつつも、日本のソフトパワーは必ずしもこれらの概念からでは成り立たないと主張する。むしろ、日本のタジキスタンにおけるソフトパワーはタジキスタンにおけるロシア、中国、米国の積極的な外交政策と比較し、より中立的で自国の外交政策における自国の利益主張が控えめな部分にある。タジキスタン国民からみてロシア、中国とアメリカのように自国のみの利益追求に向けて動く国より、日本のような自国利益主張よりもタジキスタンの人材育成などを重視する部分こそが、日本のこの地域における魅力と評価を高めており、タジキスタンにおける日本のソフトパワーを強化していると主張する。

本論文の強みとして強調できる部分は主に二点である。第一点目として本論文はソフトパワーを国際関係の理論的な枠組みの中で分析しているが、これまでに中央アジア地域におけるソフトパワーの概念の分析は比較的稀であった。第二点目として、本論文は日本とタジキスタンの関係に関して新しいデータと知見を提供している。具体的に水資源問題、内戦後の復興過程における日本の貢献、およびタジキスタンの人口問題

を解決する上での日本の教訓の事例は、これまでに研究されていない資料に基づいており、それらに含まれているデータから日本の外交政策に関して新たな見方を提供することができる。本論文の弱点として、分析における理論と事例の一致の程度において改善の余地がある点で、この点を今後の課題として検討していく必要がある。しかし、このような弱点は本論文の今後の課題としてあげるべきものであり、本論文に含まれている分析とデータの新鮮さから判断し、博士論文としての価値は高いと認められる。以上のことから審査委員は本論文を博士論文として認め、以下の結論に至っている。

2 最終試験

平成28年1月20日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（学術）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。